

## B. ラッセルの倫理思想

野 村 博

### 1 はじめに

「おそらく現代の哲学者で、その倫理観について、ラッセルほど痛烈な批判を受けてきたものは、いないであろう。しかし、当代一流の思想家のうち、ラッセルほど現代流行の陳腐な紋切り型の信念に対して、こんなにもその合わない所信を思いきって表明してきた人もまた、ほとんどいなかったのである。ラッセルの倫理観が示す知恵を歴史が後になって肯定するか否定するかはともかくとして、反俗的な思想の闘士として戦い、不合理に思われる観念ならどのような観念でも問題にしようとするラッセルの願望は、まことに感嘆に価いするのである。もとより、道徳を一群の確固たる知識であると考える人々が、古代の迷信に深い根をもつものが多い伝統的な信念について、ラッセルが行なってきたきびきびした批判を読んでも、何ら満足した快感を得ないことは明らかであろう。」<sup>(1)</sup>

これは、バートランド・ラッセル (1872~1970) のアンソロジーともいうべき “The Basic Writings of Bertrand Russell” (1961) を編集した Robert E. Egner and Lester E. Denonn が、その “Part IX The Moral Philosopher” のタイトル・ページに書き添えた評釈である。

まことに、今世紀最大の哲学者の一人バートランド・ラッセルは、誰もが当然のことと考えるほど明瞭に思われることを問題にして、既成の観念が依って立つ根拠や伝統的な信念が由って来たる源泉を明らかにし、宇宙における人間の地位についての自然科学的な認識に基づいて、人生における真実と幸福をひたすら情熱的に追求してきたまことの哲人である。ラッセルについての卓越した伝記を書いた Alan Wood が、その書名を “Bertrand Russell: The Passionate Sceptic” (1957) として、「ラッセルは、情熱的にものを信じる人間になりたかったがために、情熱的な懷疑論者だったのである。」<sup>(2)</sup> と言っているが、ラッセルは、人生における真実と幸福を追求するためには、いっさいの既成の観念や権威を容認せず、事物の本性にいたるまで徹底的に問い続けた懷疑の人である。「冷笑的な懷疑主義は不毛であるが、情熱的な懷疑論者は勇氣と成就の人生を生きることができる。」<sup>(3)</sup> と Alan Wood も述べているとおり、ラッセルは、おそらく医学を除いてあらゆる学問の領域にわたり、哲学的に検討し省察して、かす多くの業績を残しながら、無前提の学としての哲学本来の道をほとんど一世紀に垂んとして生

き、長寿を全うした不屈の哲人である。

しかし、このことは、ラッセルの哲学的な見解が、生涯をともし終始一貫して変化しなかったことを意味するものではない。「ラッセルは、自分自身の説だと誇って呼べる理論を生み出し、それから一年かそこら経つと、嬰兒殺しをよくやった。ちょうど大抵の哲学者が論敵の説を切り倒すのと同じように、ラッセルは、無慈悲にも自説を切り倒し変えたものであった。」<sup>(4)</sup> もちろん、Alan Wood が指摘しているように、見解は変えられても、常にラッセルには「実体は必要以上に増加してはならない、という原理に基づいた『オッカムの剃刀』として知られる方法の一貫性」があったが<sup>(5)</sup>、しかし、ラッセルみずからも認めているように、「私が哲学に関してものを書き始めて以来、極めて多くの事柄についての私の見解は、たびたび変化してきたのである。」<sup>(6)</sup> いや、むしろ、それどころか「哲学的な学説の体系が変化しないことは、知的な沈滞の証拠である。」<sup>(7)</sup> とさえ、ラッセルは考えているのである。思うに、ラッセルにおける哲学思想の変化は、所与の歴史的現実に対して合理的な経験主義の態度で対処する結果であるとともに、「情緒的に望ましい結論に向けて哲学上の論議を操作しようとすることは、最大の知的犯罪である。」<sup>(8)</sup> という確信をもつ彼の知的な正直さの表われでもあろう。

ところで、R. E. Egner and L. E. Denonn も、さきに引用した評釈に付け加えて、「ラッセルの言語、論理、哲学一般についての観念が歳月を経るにつれて変化してきたのと同じように、道徳論の領域においても、彼の観点が徐々に変化し発展してきたのがわかる。」<sup>(9)</sup> と言っているが、私は、以下この小論において、ラッセルの多方面にわたる哲学的思索のうち狭義の倫理思想としての倫理学説について、その変化・発展の跡を彼の著作により、できるだけ彼自身のことばを引用しながら、いわば年代記的に追求め、彼の政治・社会思想の根底にあると考えられる倫理観を明らかにしていきたいと思う。

## 2 初期の倫理学説

かず多いラッセルの著書・論文のうち、倫理学に直接かわる初期の作品としては、“The Elements of Ethics” (1910)<sup>(10)</sup> を最初に取りあげることができる。

この論文においてラッセルは、倫理学は通常人間の行為を取り扱う実践的な研究であると考えられているが、実践ではなく実践に関する命題を研究するものである、と倫理学の概念をまず明確に規定する。それから、善き行為と言われるものは、「それ自身において善なるもの」の手段である行為であるから、「それ自身において善なるもの」に関する研究が、行為の諸規則を決定する以前に必要なと論じて、「それ自身において善（あるいは悪）なるもの」の意味を明らかにすることが、倫理学の第一歩である、と倫理学の主題を規定している。

ところで、善・悪の観念は、ラッセルによれば、「さらにいっそう複雑ないろいろの観念の最も単純な構成要素となる観念であるから、分析したり、他のそれ以上の単純な観念でつくりあげたり、することのできないもの」<sup>(11)</sup> である。ある事物が「それ自身において善なるもの」

であると言うことは、ちょうどある事物が「丸い」「四角い」と同じように、私たち一人々々の意見とは独立して無関係に、「対象に属する性質」であって、「個人の意見や願望とは無関係な性質をもつものとして客観的なもの」である。したがって、ある事物が善かどうかに関して二人の人の意見が異なる場合には、そのいずれが正しいかを知るのは極めて困難ではあっても、ただ一方だけしか正しくはありえないのである。このようにして、ラッセルにとっては、善悪の価値判断の相違は、趣味の問題ではなく、しかも善悪を評価する方法は、直接判断であって、論証によって決められるものではないのである。

さて、この“The Elements of Ethics”を収録している“Philosophical Essays”(1910)の当該論文の脚注に、「以下の所説は、主として G. E. Moore 氏の“Principia Ethica”に基づいているから、さらに詳しくは同書を参考にすること。」<sup>(12)</sup>と付け加えていることから明らかに、ラッセルは、G. E. Moore をほとんど踏襲して、<sup>(13)</sup>いわゆる直覚主義(Intuitionism)の立場に立ち、善の観念は、分析も定義もできない単純な観念で、決して証明することはできないが、直覚的に知られる客観的な価値である、と考えているのである。

この論文の2年後に出版された“The Problems of Philosophy”(1912)において、ラッセルは、アプリオリな認識の原理について述べながら、倫理的価値判断にも言及して、次のように論じている。「非論理的なアプリオリな認識のうちで最も重要な例は、おそらく、倫理的価値に関する認識であろう。」<sup>(14)</sup>すなわち、「事物の本質的な望ましき」、「それ自身において価値があるもの」に関する判断は、経験によって証明することも反証することもできないのであって、それは、あるべきものを現にあるものから演繹することは不可能だからである。「何が本質的に価値をもっているかに関する認識は、論理がアプリオリであるのと同じ意味において、すなわち、このような認識の真実性は経験によって証明することも反証することもできないという意味において、アプリオリである、ということをただ認めることが大切である。」<sup>(15)</sup>

究極的な倫理的価値判断、それ自身において本質的に価値を有するものに関する認識は、経験によって証明ないし反証できないアプリオリなものである、とするこの“The Problems of Philosophy”の主張は、さきに取りあげた“The Elements of Ethics”の立論とまったく軌を一にするもので、明らかに1910年代の初めの頃は、ラッセルは、本質的価値についての直覚による客観的認識を確信していたのである。

しかるに、“Philosophical Essays”の改訂版(1966)への「序文」において、「私はこの巻で再版された原文に、初版を出して以来その間に介在する55年の歳月の間に私の意見が変わったために必要とされるような修正を加えようとはしていない。変化した意見のうち主要なものは、私が本書の最初の論文[“The Elements of Ethics”]を(Moore に従って)書いたときに信じていたように、今では、もはや客観的な倫理的価値というものを信じていないということである。」<sup>(16)</sup>と明言しているように、ラッセルは、その後、直覚主義を放棄してしまったのである。

また、この“The Elements of Ethics”が、Wilfrid Sellars and John Hospers 編の“Readings in Ethical Theory” (1952, 第2版1970) のなかに転載されるにあたって、ラッセルは、わざわざ、次のような注を付してくれるよう編者に依頼しているのである。

「“The Elements of Ethics”は、Moore の“Principia Ethica”の影響を受けて書かれたものである。この論文を出して間もなく、私がそこで主張している理論と意見を異にするようになったいくつかの重要な点がある。現在では私は、『善』が定義できないものであるとは考えないし、また、善という概念がどのような客観性をもつことができるにしても、その客観性は、論理的であるよりもむしろ政治的であると考えている。私が初めてこの見解に導かれたのは、Santayana が“Winds of Doctrine”のなかで私の著述を批判したことによるが、それ以来私は他の多くの方面で確証を見つけてきた。しかし、私が到達することができたどのような倫理学の見解にも、いまだ完全には満足していないのであって、そのために、倫理学の主題について再び執筆するのを私は差しひかえてきたのである。」<sup>(17)</sup>

“Philosophical Essays”の改訂版への「序文」および“Readings in Ethical Theory”への転載にあたっての「注」は、“The Elements of Ethics”が書かれてから、40年ないし50年の月日が経ってからのものではあるが、この“Elements of Ethics”を出して数年するかしないうちに、たしかに、ラッセルの倫理観は、かなり根本的に変わってきたのである。それは、おそらく、ラッセルみずから認めているように、Santayana による批判のほかに、何といっても第一次世界大戦という未曾有の事件に際会し、身をもってこの大戦を体験したからであると考えられる。ラッセルは、“The Autobiography of Bertrand Russell 1914~1944”のなかで、「1910年から1914年にいたる時期は、過渡期であった。1910年より以前の私の人生と1914年より以後の私の人生は、ちょうどファウストがメフィストフェレスに出会う前の人生と出会った後の人生のように、はっきりと別々のものであった。……実際、第一次世界大戦は、私のさまざまな偏見を私から振り落とし、多くの基本的な問題についてあらためて私に考えなおさせたのであった。」<sup>(18)</sup>と述べているが、直覚主義が棄てられるとともに、ラッセルの論調も、その後の著作においては当然のことながら変わってきたのである。

### 3 倫理的関心の変化

新たに考えなおされたラッセルの倫理観は、比較的まとまった形では、“An Outline of Philosophy” (1927) の Chapter XXII Ethics や “Religion and Science” (1935) の Chapter IX Science and Ethics で述べられているが、すでに1924年の論文“Styles in Ethics”や1925年の小冊子“What I Believe”において、私たちはラッセルの倫理観が変化してきていることを彼の問題の取りあげ方や論調ではっきりと気づくのである。

“Styles in Ethics” (1924) は、Freda Kirchwey 編 “Our Changing Morality” に収録されている論文であるが、ラッセルは、そのなかで、あらゆる時代や国家において、実定道

## B. ラッセルの倫理思想

徳は、きわめて多種多様であり、人々に拘束力があると考えられてきた道徳的教訓は、人類学者の労作で研究すれば、時・所が異なるにつれて、驚くほど種々様々であることがわかる、とまず論じ始める。したがって、普遍的に絶対的な道徳的行為の諸規則があって、この諸規則を侵害するものは誰でも邪悪である、という一般的な信念は、ラッセルによると、人類学的な事実と、人生の目的よりもむしろ行為の諸規則を確立しようとする通俗道徳の性質とからみて、当然攻撃できるものなのである。そして、ラッセルは結論的に言うのである、「おそらく厳密に言って『科学的な』倫理のようなものは存在しないだろう。人生の目的について決定するのは、科学の領域ではないのである。……人生の目的を示し、その目的の価値を人々に意識させるのは、科学の仕事ではなく、神秘論者、芸術家、詩人の仕事である。」<sup>(19)</sup>

“Styles in Ethics” というテーマ自体も示すように、「それ自身において善なるもの」を倫理学の主題とした “The Elements of Ethics” などのラッセルの初期の倫理学説と、これはいかにその基調において異なることであろうか。

1925年に出された小冊子 “What I Believe”<sup>(20)</sup> は、ラッセルが「宇宙における人間の地位と善き人生に達することについての可能性」に関して彼の所信を述べようとしたものであるが、後に1948年のいわゆる「バートランド・ラッセル事件」において、ラッセルのニューヨーク市立大学への教授就任に反対する人々が、ラッセルを宗教や道徳を破壊する背徳者として法廷へ提訴する証拠として出された書物の一冊でもある。<sup>(21)</sup>

ラッセルは、この論文において、自然の哲学と価値の哲学とは、まったく別のものであって、両者を混同することからは、害悪以外の何もかも生まれてくることはできない、と論じて、次のように述べている。私たちが善と考えるもの、私たちが好むものは、現にあるものとまったく関係がない。現にあるものは、自然の哲学にとっての問題である。自然の哲学においては、人間は自然の一部分にしかすぎないが、価値の哲学においては、事態は逆で、自然は人間の一部分にしかすぎない。すなわち、自然は私たちが想像することができるものの単一部分であって、およそ、実在上のものでも想像上のものでも、すべてのものは、私たちが評価することができるのであり、私たちの価値判断がまちがっていることを示す外部の標準は何も存在しない。「私たち自身が、価値の究極的で反駁できない裁定者である。」<sup>(22)</sup> 価値の世界においては、私たちは自然より大きく、自然そのものは中性的で善くもなければ悪くもなく、賞賛にも非難にも値いしないのである。「私たちこそ価値を創造するのであり、私たちの欲望こそ価値を付与するのである。」<sup>(23)</sup> 善き生活を決めるのは、自然ではなく、私たち自身なのである。

こう述べたあとでラッセルは、Joe Park によると「ある哲学者が『おのれの欲するところを人に施せ』という黄金律以来の最大の倫理的原理であると感動して呼んだ原理」<sup>(24)</sup>、すなわち、「善き人生とは愛により鼓舞され知識により導かれた人生である。」と主張する。<sup>(25)</sup> 知なき愛も、愛なき知も、ともに善き人生をもたらすことはできない。そして、愛の諸相を論じてから、ラッセルは、知識について、次のように述べるのである。厳密に言って、科学的知識と

区別された倫理的知識のようなものがあるとは考えられない。どのような行為が正・不正であるかは、その蓋然的な結果との関係を除いて決めることはできないのである。達成すべき目的があれば、その達成方法を発見するのは科学の問題である。道徳的規則もすべて、その規則が私たちの欲求する目的を実現する方向に向かっているかどうかを検討することによって、吟味しなければならない。すべての行動は欲求から生じるから、倫理的概念は、欲求に影響を及ぼすということを除けば、まったく重要性はないのである。つまり、人間の欲求のほかには、何ら道徳的標準は存在しない。正しい行為とは、欲求に役立つものだということである。もとより、正しい行為が広く人の心に訴えるべきであるならば、人類の大部分がその目的を欲求するようなものでなければならない。したがって、「倫理的論証の有効性は、ある種の行為の方が他の種の行為よりも、広く欲求された目的に対する手段である、ということを証明することに依存している。」<sup>(26)</sup> かくて、ラッセルが、「善き人生とは愛により鼓舞され知識により導かれた人生である。」と言うのは、できるだけこのような生活をしたい、また他の人々もこのような生活をしてほしい、という彼の欲求の表現にほかならないのである。このような生活が「有徳的」で、その反対の生活が「罪深い」とか、ラッセルは言うつもりはない。というのは、彼にとっては「『有徳的』とか『罪深い』とかは、何ら科学的な正当づけをもっているようには思われない概念である。」<sup>(27)</sup> からである。

前述の“*Styles in Ethics*”といい、この“*What I Believe*”といい、それまでの1910年代に書かれたものと比較したとき、ラッセルの倫理的な観念や関心が、いかに変化してきているかは明白であろう。この変化を一段と明確に、やや体系的にまとまった形で示しているものが、すでに上述したとおり、“*An Outline of Philosophy*”と“*Religion and Science*”のそれぞれ倫理学に直接関係した部分である。次に、引き続いて両書を眺めてみよう。

#### 4 善と欲求

“*An Outline of Philosophy*” (1927) の Chapter XXII Ethics は、次のようなことばで書き始められている。

「倫理学は伝統的に哲学の一部門であるから、そのために私も論じようと思う。しかし、私自身は、倫理学が哲学の領域に含められるべきものとは、ほとんど考えていないのである。けれども、その理由を証明しようとするれば、主題そのものを論ずるのと同じくらい長くかかるだろうし、また、おもしろくもないだろう。」<sup>(28)</sup>

このように書き始めたラッセルは、暫定的な定義として、倫理学は、「行為の諸規則を決定するのを助ける一般的な諸原理から成る」ものと規定し、具体的な特定の状況において人がいかに行為すべきか、を扱う *Casistry* (決疑論) とは異なるし、さらにまた、「汝盗むなかれ。」というような行為の具体的な諸規則を扱う *morals* (道徳) とも異なることを指摘する。「倫理学は、かかる諸規則を引き出すことができる基礎を与えるものと期待されている。」<sup>(29)</sup> ところ

## B. ラッセルの倫理思想

で、道德の諸規則は、まったく旅行をしたことのない人々や人類学を研究したことのない人々にとってほとんど理解されないほど、時代・人種・信条などによって異なるのである。しかし、倫理学は、道德の諸規則よりも、はるかに一般的ではるかに変化しないものとかかわっている。このような倫理学の主題にアプローチする最善の方法は、ラッセルによると、「何々をすべきである。」と人が言うとき何が意味されているのかを問うことである。「何々をすべきである。」というような文には、まず、情緒的な内容がある。つまり、「この行為は、私が是認の情緒を感じる行為である。」という意味が含まれているのである。しかし、この事柄を私たちは、このままにしておきたくはない。つまり、「個人的な情緒よりももっと客観的・体系的・恒常的な何か」を見つけないのである。<sup>(30)</sup>

そこでラッセルは、歴史的に考えて、まず神々の權威、政府の權威、あるいは慣習の權威のいずれにしろ、ともかくも權威に服従することに、美徳ないし善行があったとみる。そして、ラッセルは、たとえばモーゼの十戒のように、「時・所を超えてあらゆる状況において美徳ないし善行を決定する一定の行為の諸規則がある。」<sup>(31)</sup> という説を検討するのである。この見解を倫理の基礎にすることは、ラッセルによると、まず第一に、たとえば金本位制にすべきか否かというような問題に対して試してみてもわかるように、人間の行為の全領域にわたることができない規則であるから、賛成できない。次に、私たちはみな、ある結果は望ましく他の結果は望ましくない、と感じるのに、この説のように周囲の事情を考慮しない行為の諸規則には、私たちが望ましいと考えるような結果になるときもあれば、また望ましくないと考えるような結果になるときもあるだろうから、賛成はできないのである。さらに第三に、この説に対しては、道德の諸規則はどのようにして認識されるのか、と問いたすことができよう。従来この問いに対しては、啓示と伝統によって知られると答えられてきたが、啓示や伝統は哲学外的な認識の源泉であるし、良心によってと答えられても、良心は、道德的觀念の歴史を究明してきた人ならば容易にわかるように、時代により異なるものであるから、良心によって時・所を超えた行為の諸規則が認識できるとは言えないのである。<sup>(32)</sup>

權威に対する服従に美徳ないし善行がある、というもう一つの見解に、ラッセルによると、「行政官の倫理」ということができるものがある。この見解によると、人がたまたま所属している社会の道德的諸規則に対して服従することが美徳であると言われ、社会的な適合一致を美徳の本質と考えるのであるが、もしそうだとすれば、ある慣習は善いとかその政府は悪いとか言うことに何ら意味がないことになるのであって、このような見解は、専制君主や喜んでこれに仕える奴隷にふさわしいものではあっても、進歩的な民主主義において生き残ることができない見解である。<sup>(33)</sup>

そこで、ラッセルは、正しい行為は行為者の動機ないし心の状態によって定義すれば、少しは正しい見解に接近するようになると考えるのである。この説によると、ある情緒によって起こされた行為は善で、ある他の情緒によって起こされた行為は悪である、とされるのであ

て、ラッセルは、この見解は正しいが、哲学的にはさらに基本的なものからこの見解を引き出すことができると考えるのである。

以上考察してきた理論は、すべて、行為の正・不正を行為の結果により判断する説と対立しているが、この結果論のなかでも最も有名な功利主義哲学によると幸福が善であるとされるが、ラッセルによれば、幸福は善の定義として適当ではないけれど、行為をその結果によって判断しなければならない、という意見には同意するのである。もちろん、日常生活の切迫した事情において人はあらゆる行為の結果を考えぬくことはできないが、一般に容認された道德上の掟は、それが望ましい目的を達成するのになお役立つかどうかを入念に検討しなければならない。道德上の掟は、法的規範と同じように、常に公共の善を動機として保持しながら周囲の状況の変化に適応させなければならないのである。とすれば、公共の善は何に存するのか考えねばならないが、功利主義の見解によると、「正しい行為」は、「望ましい結果を生じること」を意図された行為である。それでは、正しい行為の目的となるものは何か、をどのようにして発見できるのか自問しなければならないこととなる。<sup>(34)</sup>

ここでラッセルは、Moore の直覚主義に言及する。「たとえば、G. E. Moore 博士が唱道した見解、つまり、『善』とは定義できない概念であって、それ自身において善であるような事物について、私たちはアプリアリにある一般的な命題を知っている、という見解がある。幸福、知識、美の鑑賞のようなものは、Moore 博士によると、善であることが知られている。さらにまた、私たちは善であるものを創造し悪であるものを防止するように行為すべきであることも知られている。私は以前この見解を自分でももっていたが、幾分かは Santayana 氏の“Winds of Doctrine”によって、この見解を棄てるようになった。現在では私は、善・悪は欲求から派生したものだと考えている。といっても単純に、善は欲求されたものである、と言うつもりではない。というのは、人々の欲求は葛藤し、『善』とは、私の考えによれば、主としてこの葛藤からの出口を見つけようとして目論まれた社会的概念だからである。しかし、この葛藤は、異なった人々の欲求の間にだけでなく、一人の人の異なった時の、いなじ時にさえみられる、そしてたとえその人がロビンソン・クルーソーのように単独であるとしても、なおみることができる両立不能の欲求の間にも存在するのである。」<sup>(35)</sup>

そして、ラッセルは、「善」の概念が欲求の葛藤についての反省からどのようにして出てくるのか、考察をすすめる。およそ私たちの欲求は、生得的性向、教育、現在の周囲の状況という三つの要因の所産であるが、私たちが何かある事物を欲求するとき、それを「善」と呼び、何かある事物を嫌悪するとき、それを「悪」と呼ぶ。ことばは、恒常的で社会的なものであるから、「善」もある社会集団の全体によって欲求された事物に適用されるようになる。ところで、異なった個人間の欲求が葛藤する世界よりも調和する世界の方に、いっそう多くの善が存在しうることは明白である。したがって、「不調和な欲求よりもむしろ調和的な欲求を生じるように行為せよ。」<sup>(36)</sup> というのが最高の道德的規則になる、とラッセルは説くのである。そし



## B. ラッセルの倫理思想

て、そのためには二つの主要な方法がある。一つは、異なった個人や集団の利害ができるだけ葛藤しないような社会制度を生み出すことであり、二つには、個人の欲求が欲求相互や隣人の欲求と調和することができるように個人を教育することである。これらは、いうまでもなく、政治・経済と教育の問題であるが、ラッセルは、さらに結論的に次のように述べている。<sup>(37)</sup>

調和的な欲求が私たちの求むべきものであれば、愛は憎よりも善いことは明らかである。二人の人が相互に愛し合っているときは、二人とも欲求を満足させることができるが、相互に憎み合っているときは、せいぜい一人だけしか欲求の目的を達成することができないからである。また、知識に対する欲求も奨励しなければならないことは明らかである。一人が獲得する知識は、他人から知識を取り去ることによって得られるわけではないからである。しかし、土地所有欲や権力欲のような所有的衝動は抑止して、芸術的創造、科学的発見、有用な諸制度の促進助長というような創造的衝動を奨励することが大切である。人々の欲求が葛藤する場合には、知識も害悪をなすけれど、欲求が調和している世界では善き結果しか生じないのである。そして、ラッセルは、結論を “What I Believe” で述べたと同じ単一の句で要約する。すなわち、「善き人生とは愛により鼓舞され知識により導かれた人生である。」と。

## 5 科学と倫理学

信念が生み出した誤謬の歴史を振りかえりながら科学の任務について論じた “Religion and Science” (1935) の Chapter IX は、科学と倫理学の関係や相違を価値の点から浮き彫りにした論文である。

まずラッセルは、科学が不じゅうぶんだと主張する人々が、科学は「価値」について何も言うべきことがない、という事実に訴えるが、このことは彼も認める。しかし、一步を押しすすめて、「倫理学には科学が証明も反証もできない真理が含まれている。」と推論するなら、ラッセルは同意しないと言うのである。<sup>(38)</sup> そして、この問題は、明白に考えることはそんなに容易なことでないうえに、彼自身の見解が約30年前とはまったく異なっているが、もともと倫理学に関する意見については一致がまったくないから、科学の断定ではなく彼の個人的な信念を述べる、と断わって論を展開している。

倫理学は、伝統的に、道徳的諸規則に関する部分と、それ自身において善なるものに関する部分との二つから成っている。まず、道徳的諸規則に関する部分であるが、ラッセルによると、行為の諸規則は、その多くが儀式に起源をもっているが、なかには社会的効用をもっているものもあって、人々が反省的になるにつれ、諸規則よりも心の状態に重点がおかれるようになってきた。「良心」に対する信念も、外部的な行為の諸規則に訴えないですませる一つの方法であった。しかし、良心は人が異なれば異なったことを伝えるものであり、また、無意識の研究によって良心に従う感情に世俗的な原因があることが知られたので、倫理を外面的な道徳的諸規則から解放しようとするのは正しいが、「良心」という概念によっては満足になしと

げることにはできないのである。

そこで次に、ラッセルは、道徳的諸規則をやはり従属的な位置におく一つの別な立場に哲学者たちが異なった方法で達したと言う。すなわち、哲学者たちは、「それ自身においてその結果とは独立して存在することが望まれるもの」という意味での「善」の概念を組み立てた。そして、彼らは、神を知り愛すること、普遍的な愛、美の享樂、あるいは快樂というように、さまざまに異なった善概念を形成してきたのである。

しかしながら、ラッセルによると、これは善であるとか、あれは善であるとか言うとき、何を意味しているのか私たちが明確にしようとすれば、いつしか私たちは、大きな困難のなかに巻きこまれてしまうのである。科学上の問題であれば、議論をしている両当事者の間で証拠が出されて、結局どちらか一方がよりよいことがわかるのであるが、これが究極的な善であるのかあれが究極的な善であるのかという問題では、両者ともに証拠がまったくないのである。論争をしている人々は、それぞれ自分自身の感情にだけ訴えて、相手方にも同じような感情を呼び起こすための修辞上のくふうを用いることができるだけである。このような場合に、一方が正しい、と他方を説得する科学的ないし知的な手段は絶対にない。このような問題について人々の意見を変える方法は、たしかにあるのは事実であるが、その方法はすべて感情的なものであって、知的なものではない、とラッセルは言うのである。

このようにして、ラッセルにおいては、「価値」に関する問題、すなわち「その及ぼす結果とは無関係に独立してそれ自身において善または悪なるもの」に関する問題は、科学の領域の外にある。いや、さらにラッセルは、「価値に関する問題は、まったく知識の領域の外にある。」と主張するのである。<sup>(39)</sup> つまり、ラッセルによれば、これは価値があるとかあれは価値があるとか言うとき、それは、私たち自身の感情を表明しているものであって、私たちの個人的感情が異なってもなお真理であるような事実を表現しているのではないのである。そして、ラッセルは、このことを明らかにするために、善の概念を次のように分析する。

まず最初に、善・悪の観念はすべて「欲求」と何らかの関連があることは明らかである。一見したところでは、私たちがみな欲求するものは何でも「善」であり、怖れるものは何でも「悪」である。私たちがみなその欲求で意見が一致すれば問題は何もないが、しかし、不幸にして私たちの欲求は葛藤する。もし私が「私の欲求するものが善である。」と言うなら、私の隣人は「いや、そうではない、私の欲求するものが善である。」と言うだろう。倫理学は、このような主観性から逃れようとする試みであるが、ラッセルは、それが成功しているとは思えないのである。<sup>(40)</sup>

ところで、ラッセルによると、「政治は、ある集団の集団的欲求を個人に懐かせようとする試みであるか、あるいは逆に、個人の欲求をその集団の欲求になるようにしようとする個人の試みである。」<sup>(41)</sup> このようにして、倫理学は政治と密接な関係をもってくることになるが、「倫理学は、私たちの欲求のある一定のものに、普遍的で単に個人的ではない重要性を与えよ

## B. ラッセルの倫理思想

うとする試みである。』<sup>(42)</sup> しかし、ラッセルによれば、人が「これはそれ自身において善である。」と言うとき、その人は、「これは四角である。」とか「これは甘い。」とか言うのと同じような陳述をしているように思われるかも知れないが、それは誤りである。その人が実際に意味していることは、「私はすべての人々がこれを欲求することを望む。」とか、あるいはむしろ、「すべての人々がこれを欲求してくれれば！」ということであると考える。つまり、倫理的文章は、形式は陳述に見えても、実際は何事をも陳述せず、ただ願望を表現しているにすぎないのである。すると、「倫理学は、真・偽いずれの陳述をも全然含まずに、ある種の一般的な欲求、すなわち人類一般——ならびに、もし存在するとすれば、神々、天使、悪魔など——の欲求と関わりがあるようなものから成り立っている。』<sup>(43)</sup> ということになるのである。これに反して、科学は、欲求の原因や欲求を実現する手段を論ずることはできるが、真または偽なるものと関わりをもつものであるから、純粹に倫理的文章を含むことはできないのである。

以上は、ラッセルみずから言うとおりに、価値の「主観性」と呼ばれる理論の一つの形態である。つまり、「もし二人の人が価値について意見を異にするなら、そこにあるのは、何らかの種類の真理に関する意見の不一致ではなく、趣味の相違である。』<sup>(44)</sup> ということである。このような見解をラッセルが採る主な理由は、これが本質的価値をもっているかあれが本質的価値をもっているかを証明する論証を何も見出すことがまったくできないからである、と言う。したがって、価値に関する見解の相違は、趣味の相違であって、何ら客観的な真理に関するものではないのである。

このような主観的価値論の結果に基づいて、ラッセルは、懲罰的な刑罰と「罪」の概念を拒否するが、あるいは人々が心配する最も一般的な結果、たとえば道徳的義務感が崩壊するのではないかというような懸念は、論理的に結論されるはずはないと主張する。というのは、道徳的義務がもし行為に影響を与えるべきものであれば、それは単に信念からではなく、欲求から成るものでなければならない。この場合の欲求は、もとより、純粹には個人的でない大きな欲求である。実際私たちの欲求は、多くのモラリストたちが考えているよりもはるかに一般的であって、単に利己的なものではない。そうでなければ、どのような倫理学説も道徳的改善を可能にすることはないだろう。実際、人々が現在よりも人類の一般的幸福に一致するように行為をするようになることができるのは、倫理的理論によってではなく、知性、幸福、恐怖からの自由をとおして大きく寛大な欲求を啓発することによってである。「善」についての定義がどうであろうとも、また、善を主観的と信じるか客観的と信じるかにかかわらず、人類の幸福を欲求しない人々は、それを促進しようとは努力しないだろうし、人類の幸福を欲求する人々は、それをもたらすためにできるだけのことをするだろう。

そして、ラッセルは、こう結論する。

「科学が価値の問題を決定できないことは事実本当であるが、それは、価値の問題が知的には決定することが全然できず、真・偽の領域の外にあるからにほかならない。どんな知識にし

でも獲得される知識は、科学的方法によって獲得しなければならない。そして、科学が発見できないものは、人類が知ることのできないものなのである。」<sup>(45)</sup>

## 6. 倫理的価値の情緒性

ラッセルの倫理学上の最大の著作である“Human Society in Ethics and Politics” (1954) は、“Human Knowledge: Its Scope and Limits” (1948) とともに、ラッセルの晩年に書かれた哲学上の二大著作であるが、“Human Society”の「緒言」のなかでラッセルは、倫理学を「知識」と見なすことができるかどうかに関して確信がなかったから、“Human Knowledge”には倫理学についての論議を含めなかった、と言っている。<sup>(46)</sup> このことから知られるように、ラッセルは、「倫理学にかかわる場合、基本的なものに関する限り結論的な知的論証を示すことは不可能である。」<sup>(47)</sup>と考えているのである。P. A. Schilpp が編集した“The Philosophy of Bertrand Russell” (1944) のなかで、J. Buchler の批判に答えるに先だって、ラッセルは、「倫理学の根本的な問題においては、理論的な論証が可能であると私は考えていない。したがって、私が論理的ないし科学的な問題に関して述べたことに対するのと同じような種類の弁護を、価値に関して述べたことに対してはしないのである。」<sup>(48)</sup>と言っている。

しかし、知的論証が不可能であるから、究極的な倫理的価値判断の客観性を信じない、ということになれば、いったい、政治上の諸問題について倫理的に判断することは、どうして可能なのであろうか。当然予想されるこのような批判——事実、ラッセルは、批評家たちからたえず、その矛盾を批判されていると言っているが、<sup>(49)</sup>——に対して、ラッセルは、妥当な批判ではないと明言し、その妥当でない理由を示すためには、かなり詳述する必要があると述べている。おそらく、これが、“Human Society”をラッセルが執筆した動機の一つでもあるだろう。

さて、本書は、その目的が独断的でない倫理学を述べ、この倫理を現代のさまざまな政治問題に応用することであると言っているように、第1部が「倫理学」、第2部が「激情の葛藤」という二部に分かれている。私はここでは、まず第1部の「倫理学」に焦点をあてて、ラッセルの倫理観を眺めていきたいと思う。

「人間は衝動と欲求の点で他のどのような動物よりも複雑であって、この複雑さから人間のむずかしさが生じてくる。人間は、蟻や蜂のように完全に群居的でもなければ、ライオンや虎のように完全に独居的でもない。人間の衝動や欲求のなかには、社会的なものもあれば独居的なものもある。……私たちが完全に社会的ではないからこそ、目的を示唆する倫理や行動の諸規則を教える道徳的掟が必要なのである。」<sup>(50)</sup>と論じて、ラッセルは、人間の群居性・独居性の両面をともに考慮に入れない倫理は、完全に満足できるものにはならないと主張する。

さらにまた、ラッセルは、同じく「序文」において、倫理や道徳的掟は、知性と衝動の葛藤

## B. ラッセルの倫理思想

のゆえに人間にとって必要なものであって、知性もしくは衝動のいずれか一方しか人間に与えられていなければ、倫理の存在する余地はない」と論じて、「衝動の生活は危険ではあるが、人間存在がその香気を失うべきでないならば、衝動は維持しなければならない。人間が幸福に生きることができるための倫理は、衝動と抑制の両極の間に中点を見出さねばならない。人間の深奥の本性のなかにあるこの葛藤のためにこそ、倫理に対する必要性が生じるのである。」<sup>(51)</sup>と述べている。ラッセルは、決して理性の役割りを単純に過大評価するようなモラリストではないのである。

ところで、道徳的な諸規則は、ラッセルによれば、時と所が異なれば信じがたいほどにも多種多様に異なっているが、実際問題として私たちは、それらの諸規則の間に優劣の差を見ることが出来る。したがって、諸規則間の優劣を判断するためには、諸規則よりまさった何かが、諸規則とは区別される倫理になければならない。ここで私たちは、ラッセルによれば、「正」・「邪」よりもむしろ「善」・「悪」という倫理学のいっそう根本的な基本概念に導かれることになるのである。つまり、「正」なる行為は、「善」なるものに対する手段である行為にほかならない。それでは、「善」・「悪」とは、いったいどのような意味なのであろうか。ラッセルは、およそ私たちに「欲求」がなければ、私たちは善・悪の対立を考えるはずは決してないであろう、と言う。つまり、「善」の定義は、「欲求」との関連ではじめて可能なのである。「ある出来事は、欲求を満たすとき『善』である、あるいはもっと正確に言えば、『善』とは『欲求の満足』であると定義できる。」<sup>(52)</sup>と、ラッセルは提唱する。そして、「私は、この定義が『善』の唯一可能な定義だと言うつもりはないけれど、ただ、その結果が他のどのような理論的に弁護できる定義よりもはるかに大多数の人々の倫理的感覚と一致するのがみられるだろう。」<sup>(53)</sup>と彼は言うのである。

「善」が「欲求の満足」であると定義されたなら、「私の善」は「私の欲求の満足」ということになるだろう。しかし、欲求は、異なった人々においてはもとより、同一の人間においても、葛藤するのが人間生活の本質的で避けられない事実である。そうすれば、欲求が「両立不能」(incompatible) のときよりも「共存可能」(compossible) のときの方が、欲求満足の量は大きいことは明らかであるから、善の定義からいって、共存可能な欲求の方が望ましいことになる。つまり、正しい欲求とは、できるだけ他の多くの欲求と共存可能である欲求であり、邪なる欲求とは、他の欲求を妨害することによってしか満足させることのできない欲求である。<sup>(54)</sup>共存可能な欲求を満足させることを、一般的善と呼ぶならば、私たちは一般的善を求む「べき」であるということになる。<sup>(55)</sup>

。「べき」にしても「善」にしても、ともに欲求や感情にかかわっている語であるから、これらの語を含む倫理的な文章は、事実の事柄を確言する陳述とは異なっているのである。つまり、倫理的判断は、事実を述べるのではなく、希望や恐怖、欲望や嫌悪、愛情や憎悪を、しばしば装われた形であるにしても、述べるものである。したがって、「倫理的判断は、直説法におい

てではなく、祈願法ないし命令法において述べなければならない。』<sup>(56)</sup> そこで、ラッセルは、「倫理学は、その基本的な材料が感情と情緒であって、知覚の対象ではないという事実において、科学とは異なる。』<sup>(57)</sup> と、第1部第1章の冒頭において明言するのである。

したがって、ある行為は、その行為者がその行為に対して是認の情緒をもっているときには、「主観的に正しい」し、非難の情緒をもっているときには、「主観的に邪」なのである。ある行為を「客観的に正しい」と言っても、文法的には何か確言をしているようにみえるが、実際は、ある情緒を話者が表明しているのにすぎない。「客観的に正しい」という概念には、異なった人々の欲求が一致しない限り、真に客観的なものはないのである。要するに、「倫理の基礎は、情緒と感情、是認の情緒、享受ないし満足の感情である。』<sup>(58)</sup> から、倫理上の論議は、いかに直説法の使用によって偽装されていても、情緒に向けられているという点で、科学上の論議とはまったく異なるのである。しかし、だからといって、倫理上の論議が不可能であると考えるはならない。ラッセルによれば、「科学においては論議によって知的確信に影響を及ぼすのと同じように、倫理においては論議によって情緒に影響を及ぼすことは、容易でないことはないのである。』<sup>(59)</sup>

人は誰でも必ず自分自身の欲求によって行動へ駆り立てられるのであるが、しかし、その欲求がすべて自己中心的でなければならない理由は存在しないのである。「個人の満足と一般の満足との最大可能な一致」<sup>(60)</sup> を生み出すことこそ、教育や政治の目的でなければならない。ことばを変えれば、「教育や社会体制によって、共存可能な目的を奨励し、葛藤的（両立不能）な目的を防止することが、賢明な社会体制の役割りである。』<sup>(61)</sup> ということになるのである。

「善」とは「欲求の満足」であるが、「何に」欲求の満足を求めるか、ということが一般的善を促進し、人生における幸福を増進させるために重要なことなのである。できるだけ多くの人間が、欲求の満足を見出すその事物が、一般的善なのである。

ところで、ラッセルによれば、「理性とは、人が達成したい目的に対して正しい手段を選択することを意味している」<sup>(62)</sup> から、理性は、目的を選択することとは何ら関係がないのであって、David Hume の言うとおり、「理性は、激情の奴隷であり、また、激情の奴隷であるべきものにすぎない。』そして、ラッセルにとっては、「欲求、情緒、激情——どれでも好きな語を選べばよいが——こそ、行動の唯一可能な原因である。理性は、行動の原因ではなく、ただ行動の調整規定者 (regulator) にしかすぎないのである。』<sup>(63)</sup> あるいは、言いかえれば、「感情は人々がどのような目的を追求するかを決定し、知性は人々がその目的に対する手段を見つけるのを助けるものである。』<sup>(64)</sup> したがって、ある目的を達成する行為の手段に関する限り、理性が関与するから、純粹に科学的な根拠に基づいて論議され決定されなければならないが、行為の目的そのものについては、欲求や感情がかかわるから、もしその目的の改変でも求めようとするれば、感情あるいは欲求に訴えなければならないのである。実際問題としては、ある行為が正しいかどうかに関して二人の人の意見が一致しない場合、大抵は手段に関して相違す

## B. ラッセルの倫理思想

ることが多いが、これは科学の領域における問題であるから、証拠に訴えることによって説得することは可能である。しかし、目的に関して相違するときには、倫理に本来的な問題として情緒に対し訴えること以外には、説得することはできないのである。けれども、「人の欲求を説得的に提示する術は、論理的な論証の術とはまったく異なるが、それにもかかわらず、ひとしく正当である。」<sup>(65)</sup> だからこそ、ラッセルみずから、かず多くの本のなかにおいて、彼の倫理的意見を熱心に表明してきたのであろう。「いろいろの欲求を調和させたいという願望が、育児室から国際政治にいたるまでの私の政治的・社会的信念の主要な動機なのである。」<sup>(66)</sup> と、ラッセルは明言しているのである。

## 7 まとめとして

さて、以上で私は、倫理学説に関するラッセルの初期の著作から、晩年の集大成ともいうべき“*Human Society in Ethics and Politics*” にいたるまでの著書・論文を取りあげて、彼の倫理思想を跡づけてきたが、今ここで簡単に要約してみると、――

初期においては、G. E. Moore の“*Principia Ethica*” で述べられている見解にほとんど追従して、善の観念は、分析も定義も不可能な単純観念であって、直覚によってのみ把握できる客観的価値であるから、究極的な倫理的価値判断は、経験によって証明ないし反証することができないアプリオリなものである、とラッセルは主張していた。

しかし、Santayana による批判や第一次世界大戦の自己体験によって、ラッセルは、一見してほとんど正反対と考えられるような倫理観をもつようになったのである。すなわち、善の観念は、すべての行動が欲求から生じるという事実からみてもわかるように、欲求との関連で定義しなければならない、と考えて、善とは欲求の満足である、とまず定義する。<sup>(67)</sup> したがって、倫理的価値判断は、当然主観的なものであって、善の観念を含む倫理的文章は、いかに事実を確言する直説法の陳述を偽装しても、所詮は欲求ないし感情の表現であるから、願望法か命令法で述べるべきものなのである。価値に関する意見の相違は、趣味の相違であって、客観的真理に関する相違のように知的論証によって意見を異にする人を納得させることは不可能なのである。

このようにして、ラッセルは、「善・悪の価値判断の相違は、趣味の問題ではない。」と言っていた初期から、「価値に関する意見の相違は、趣味の相違である。」という考えに変化していった。倫理的価値の客観性から主観性への確信の移行が、一口で言えば、ラッセルの倫理思想の変化・発展であった。

ところで、倫理的価値が主観的であるということになれば、倫理的論議は不可能なのであろうか。これに対してラッセルは、欲求とはもともと葛藤的なものであるが、両立不能の欲求よりも共存可能な欲求の方が、欲求満足の量は大きいから、善の定義からいって当然、できるだけ多くの人々にとって共存可能な欲求を満足させることが一般的な善と行うことができる、と

考えるのである。したがって、倫理的論議は、科学的論議のように知的論証に訴えることはできないが、相手の欲求や感情に訴え、影響を及ぼすことによって、一般的善を求めるように説得することは可能なのである。これこそ、教育と政治の目的にほかならない、とラッセルは言うのである。

ラッセルの到達した結論、つまり、倫理的価値は人間の欲求や感情に基づく主観的なものであるから、人々の感情を正しい方向に向くよう説得しなければならない、という結論は、Alan Wood が言うように、「他のいくつかの主題と同じように倫理学においても、ラッセルの問いそのものが彼の回答の範囲を越えたのだと率直に言う方がよい。」<sup>(68)</sup> のかも知れないが、また、あまりにも常識的に過ぎる結論であると言うこともできよう。しかし、Alan Wood がラッセルの「記述論」に関して述べているように、「偉大な思想家とは、誰もがもちろんのことと思うほど明らかに思われることを問題にする人である。ラッセルは、この能力をもっていたからこそ、偉大な哲学者だったのである。」<sup>(69)</sup> と言うことができるのかも知れない。いずれにしても、ラッセルは、このような倫理観を根底にして、年令とともに、ますます説教者となつて、人類愛に満ちあふれた精神で、人生における真実と幸福を求めて世界の平和のために、人間の生きるべき道を説いたのであろう。

<注>

- (1) Robert E. Egner and Lester E. Denonn (ed.): The Basic Writings of Bertrand Russell 1993~1959 (1962) p. 344
- (2) Alan Wood: Bertrand Russell — The Passionate Sceptic (1963) p. 12
- (3) ibid., p. 215
- (4) ibid., p. 78
- (5) ibid., p. 79
- (6), (7) R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.): The Basic Writings of Bertrand Russell p. 7
- (8) Alan Wood: Bertrand Russell p. 27
- (9) R. E. Egner and L. E. Denonn (ed.): The Basic Writings of Bertrand Russell p. 344
- (10) B. Russell: Philosophical Essays (1910) に所収のものによる。
- (11) ibid., p. 16
- (12) ibid., p. 13
- (13) George Edward Moore: Principia Ethica (1903)
- (14) B. Russell: The Problems of Philosophy (1912) p. 118
- (15) ibid., p. 119
- (16) B. Russell: Philosophical Essays, Revised Edition (1966) p. 7
- (17) Wilfrid Sellars and John Hospers (ed.): Readings in Ethical Theory (1952, Second Edition 1970) p. 3
- (18) B. Russell: The Autobiography of Bertrand Russell, Volume Two, 1914~1944 (1968) p. 15
- (19) R. E. Egner and L. E. Denonn: The Basic Writings of Bertrand Russell pp. 349~350
- (20) B. Russell: Why I am not a Christian (1957) に所収のものによる。
- (21) ibid., p. 45



## B. ラッセルの倫理思想

- ②②, ②③ *ibid.*, p. 50  
②④ Joe Park : Bertrand Russell on Education (1964) p. 32  
②⑤ B. Russell : Why I am not a Christian, p. 51  
②⑥, ②⑦ *ibid.*, p. 55  
②⑧ B. Russell : An Outline of Philosophy (1927) p. 233  
②⑨, ③① *ibid.*, p. 234  
③① *ibid.*, p. 235  
③② *ibid.*, pp. 235~236  
③③ *ibid.*, pp. 236~237  
③④ *ibid.*, pp. 237~238  
③⑤ *ibid.*, p. 238  
③⑥ *ibid.*, p. 242  
③⑦ *ibid.*, p. 243  
③⑧ B. Russell : Religion and Science (1935, O. U. P. Galaxy Book 1970) p. 223  
③⑨ *ibid.*, p. 230  
④① *ibid.*, p. 231  
④①, ④② *ibid.*, p. 232  
④③ *ibid.*, p. 237  
④④ *ibid.*, pp. 237~238  
④⑤ *ibid.*, p. 243  
④⑥ B. Russell : Human Society in Ethics and Politics (1954) p. 7  
④⑦ Paul Arthur Schilpp (ed.) : The Philosophy of Bertrand Russell (1944) p. 719  
④⑧ *ibid.*, p. 720  
④⑨ B. Russell : Human Society, p. 7  
⑤① *ibid.*, p. 16  
⑤① *ibid.*, pp. 15~16  
⑤②, ⑤③ *ibid.*, p. 55  
⑤④ *ibid.*, p. 59  
⑤⑤ *ibid.*, pp. 60~71  
⑤⑥, ⑤⑦ *ibid.*, p. 25  
⑤⑧ *ibid.*, p. 118  
⑤⑨ *ibid.*, p. 88  
⑥① *ibid.*, p. 148  
⑥① *ibid.*, p. 19  
⑥②, ⑥③ *ibid.*, p. 8  
⑥④ *ibid.*, p. 176  
⑥⑤ P. A. Schilpp (ed.) : The Philosophy of Bertrand Russell, p. 724  
⑥⑥ *ibid.*, p. 725  
⑥⑦ 善を欲求の満足と定義したのは、実はラッセルが最初ではなく、たとえば、すでに Thomas Hill Green も “Prolegomena to Ethics” (1883) において論じているところであるが、今この小論においては取りあげない。《拙著『人間性と倫理』第3章「道徳と国家——トーマス・ヒル・グリーン」の哲学」P. 91 参照》  
⑥⑧ Alan Wood : Bertrand Russell, p. 203  
⑥⑨ *ibid.*, p. 57

——1972. 7. 29 撰筆——

1. The first part of the report deals with the general conditions of the country and the progress of the work during the year.

2. The second part of the report deals with the results of the work during the year.

3. The third part of the report deals with the results of the work during the year.

4. The fourth part of the report deals with the results of the work during the year.

5. The fifth part of the report deals with the results of the work during the year.

6. The sixth part of the report deals with the results of the work during the year.

7. The seventh part of the report deals with the results of the work during the year.

8. The eighth part of the report deals with the results of the work during the year.

9. The ninth part of the report deals with the results of the work during the year.

10. The tenth part of the report deals with the results of the work during the year.

11. The eleventh part of the report deals with the results of the work during the year.

12. The twelfth part of the report deals with the results of the work during the year.

13. The thirteenth part of the report deals with the results of the work during the year.